体験をアーカイブする。

広島には，公共的な広場として丹下健三による平和の広場，そして平和記念資料館が存在する．

八月六日には，平和記念式典の会場となり全員が同じまっすぐに伸びる軸線の単一な焦点を向いて，同じことを考え，平和のために祈りをささげる広場となる．一方で日常での使われ方といえば，死者に尊厳を払うかのように中央の芝生広場には人が入れず，追いやられるようにして周辺の芝生にレジャーシートを広げたり，川沿いに腰かけるなどして，広場外部の地形で市民が場所を見出してくつろいでいる．この広場は，本当の意味で公共的な広場といえるのだろうか．

私たちの考える公共的な広場とは，みんなが同じ方向を向き同じ受け取り方をするのではない，公共的で，かつ特別な日だけでなく日常的に市民が学び考えることのできる場所である．

提案

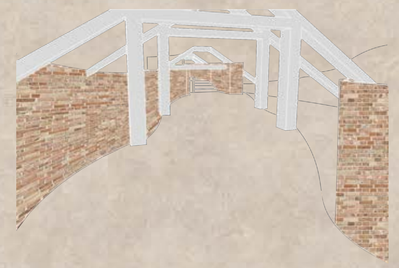
過去ここが戦後苦しい状況のなかでも子供たちの学び舎となったことや，住宅街と学校に挟まれるように位置する場所性を鑑みて，市民が学生たちと発見的に学べる場を構想する．一例として戦争体験の伝承を挙げると，本当の意味で戦争体験を伝えることができているのだろうか，“公共的”なあり方で人々は戦争による“体験”を“学ぶ”ことができているだろうか，平和記念資料館でみられるような展示という方法は，多くの人に戦争の悲惨さを伝えるために非常に有効な方法であるが，読み取る側の解釈の余地を減らし単一的な解釈を促すような方法といえるのではないか．戦争による苦しみは人によって異なり，多様な視点から多様な苦しみを“学ぶ”必要があるのではなかろうか．例えば，戦争に向かう者の悲しみもあれば，見送る者の悲しみもある．亡くなった者の悲しみもあれば，残された者の悲しみもある．日本人の悲しみもあれば，敵国にとっての悲しみもある．そして，そんな苦しみの中での，小さな幸せも沢山あったと考えます．このように，体験は単一化することはできず，各人のそれぞれの視点から，自ら“発見”するようにして“学んで”いくような“公共的”な広場を提案する．その際に，今までのように教室があり，そこで学びが始まるというあり方ではなく，市民と学生の間から生まれる純粋な学びへの希求から，場を発見し，そこが自然と教室となるような，地形的な建築を提案する．

体験の保存

そこで私たちは，形を保存することによる建築の保存ではなく，建築において行われた“体験”を保存することを試みる．建物の外見に捕らわれることなく純粋に体験のみを切り取るために，建物を地下に埋めることで，“体験”のみをアーカイブすることを考えた．また，体験を単一的に伝えるのではなく，各人が発見することによる学びを促すことを考え，全体を地形的にすることで，人々が自らの発見により場を見出し，そこで発見的な学びが行われるような場所を提案する．また，それにより転用可能性を上げ将来の様々な利用を促すものとする．

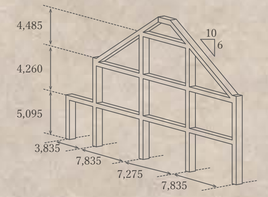
外と内の対比

この長い敷地を活用し，市民が日常的に通勤や散歩道として行き交うことのできる場所とし，そこでの学生との出会いを創り出す．それにより，特別な日のみならず日常的な学びの場をつくりだす．



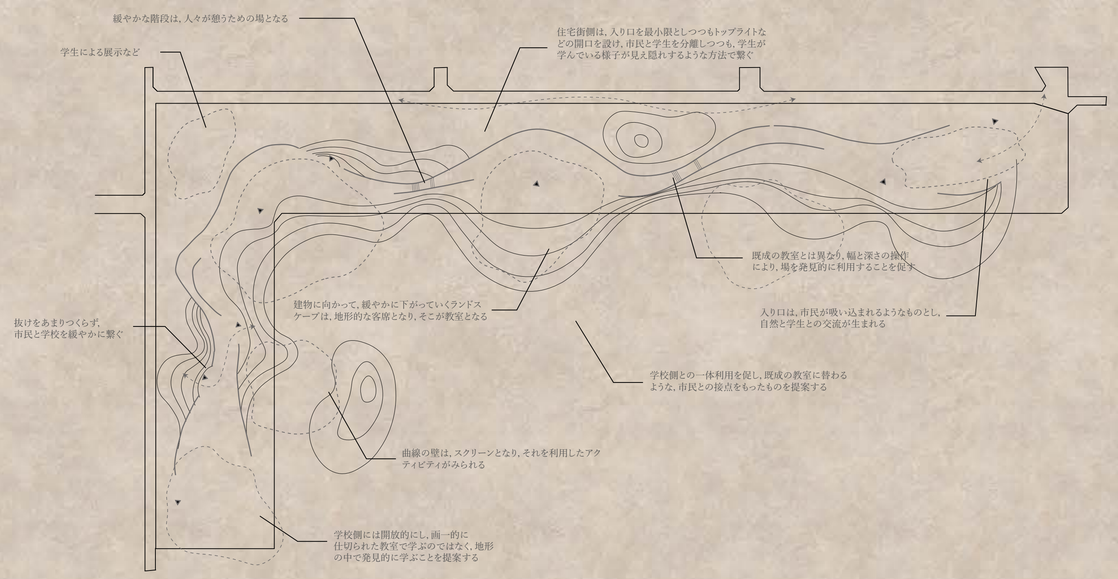
体験をアーカイブする際に，外見としての見え方に比べ内部空間での体験の保存を重要視した．ファサードの体験に比べ，様々な感情が生まれた内部空間での体験を現代においても引き継ぐべきであると考える．

保存方法

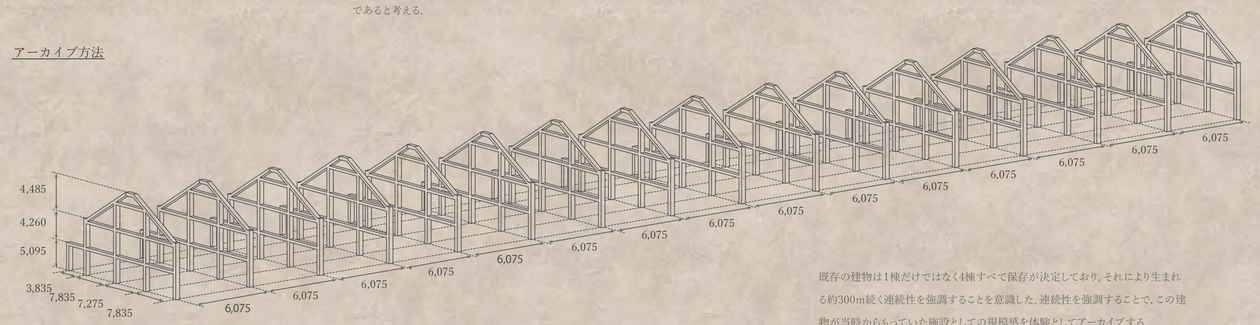


内部空間に，歴史が刻み込まれたものとしての煉瓦と既存の躯体とバットレスを再利用し，旧広島陸軍被服支廠を体験としてアーカイブする．

プロムナードについて



アーカイブ方法



既存の建物は1棟だけではなく4棟すべて保存が決定しており，それにより生まれる約300m続く連続性を強調することを意識した．連続性を強調することで，この建物が当時からもっていた施設としての規模感を体験としてアーカイブする．

既存のファサードは市民に対しての圧迫感が強く親しみが持てない．既存の近寄りがたい印象も重要な体験の一つであると考えるが，市民に開かれた建築としたいと考え，できるだけ柔らかい印象を持たせるために曲線的なファサードとした．また，それにより，全体を地形的にすることで体験の多様性を生み出した．